

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月25日現在

機関番号：13701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2008～2011

課題番号：20730551

研究課題名（和文） 小中高一貫の文章表現プログラムの開発

研究課題名（英文） Developing a writing program from elementary school through high-school

研究代表者

小林 一貴 (KOBAYASHI KAZUTAKA)

岐阜大学・教育学部・准教授

研究者番号：30345772

研究成果の概要（和文）：書くことの学習指導では、授業場面における社会的役割とテーマや題材をめぐる議論へ参加する役割が関わっており、それが相互に作用し合いながら学習者の書く活動が構築されていく。書き手の文章の論旨や要旨に対して他の参加者が新たな提案を含む質問や要求がなされるような談話の展開により、自立した書くことにつながる足場が作られる。こうした談話の展開は、小学校から高等学校までの学習指導に応用することが可能である。

研究成果の概要（英文）：Learner's social role in a classroom and the role in the argument involving a theme or a subject matter are concerned each other for constructing writing activity. The question which includes new version from other learners to a writer's point of an argument and summary of a text develops scaffolding interaction in discourse for writing. Such a discourse can be applied to the writing instruction from an elementary school to a high school.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学、教科教育学

キーワード：書くことの教育、文章表現指導、ジャンル分析、協同学習、足場づくり、談話分析、授業分析、作文教育

## 1. 研究開始当初の背景

教員研修等の機会において、小・中・高等学校の間には書くことの学習指導に顕著な違いがあることが参加者より指摘されてきた。そして、各校種の教員がその違いを理解し問題点を相互に共有することが、学習指導を行う上でも有益であるとの意見が出されてきた。書くことの指導方法や学習活動の違いは、学習スタイルの違いとして児童・生徒

の新たな学習環境への適応に関わるとともに、学習の目的や内容の違いを学習者にもたらす可能性がある。このことから異なった校種間における書くことの学習活動の連続性の確保のあり方を確立していく必要性を感じるにいたった。

指導方法や学習活動とは、具体的には教室における日常的な談話である。その談話の展開のあり方にどのような共通性や連続性を

見出せるかが、そして共有される学習目標の実現に向けた談話の展開はどのようなものか、ということが主たる関心事項となる。学習の目標としては、批判的な思考力を伴った自立した書き手の育成を目標に据え、学習者にとって一貫性のある学習指導の方法を各校種の教師と研究者が共同で構築することとした。

## 2. 研究の目的

書くことの授業における話し合い活動について話題と談話の展開を分析、考察することにより、異なった校種間において連続性のある自立した書き手の育成に向けた学習指導のあり方を明らかにすることを目的としている。

異なった校種、またそれぞれ校種においては書くことの教育についてのカリキュラムや教育内容に違いがある。そうした違いを前提としつつも、それぞれの教室の中で行われる談話の展開として実行可能なやりとりを見出していくことが必要となる。

書くことの学習の基盤となる授業の談話については、初等教育から高等教育の段階において創造性と社会性を兼ね備えたりテラシーの基盤となる能力の育成、そして社会への適切な参加を促す教育の議論に基づく研究がなされてきた。その中で、テキストのジャンル分析と読み書きの学習指導の談話の分析に基づき、教師と学習者、学習者と学習者のやり取りを通して自立した書き手を育成する「書くことの「足場づくり」(scaffolded writing)」の指導過程のモデルが構築されてきている。これは学習指導の過程に即した談話の展開を示し、授業の参加者の立場、参加の方法という視点からモデルを提示するものであり、本研究の問題意識に沿う発想をとるものである。

しかし、実際の授業にモデルを応用するにあたっては、カリキュラムや授業の参加者の役割関係など、クラスの実態に応じた指導のあり方を検討する必要がある。特に、応用する際に問題となってきたことの一つとして、教師と生徒の儀礼化された相互作用の型から抜け出すことができず、学習者にとって自立した問題解決の学習が成立しないということが挙げられる。

自立した書くことの学習へとつながる学習活動として、先のモデルの中には「足場づくりの活動(scaffolded activity)」の段階が位置づけられている。この段階は、教師によるモデリングにおいて示されたジャンルの特性などが学習者にとって最終的な目的とならないようにし、また、学習者個々の学習活動にとどまらず、主に授業で取り上げられたトピックや作り出すテキストの題材についての議論が主となるべきであるとされてい

る。そして、授業の参加者間による議論やコメントによって学習者自身が新たな発見を伴って進められる必要があるとしている。こうした段階に教師が関与した場合、クラスにおける教師と生徒という関係が前景化され、学習者自身による学習を妨げる場合が生じかねない。また、書き手によってさまざまなとらえ方がなされる題材に対して、個別あるいは全体で対応することは難しく、対応するとしても従来型の適切な答えや、やり方を導き出すようなやりとりに陥りがちになるという問題がある。このように、この段階は教師と学習者による一対多によるやりとりでは指導が難しいという問題が指摘されている。

こうした問題に対して、自身の書くことをめぐって学習者が均等に学習に参加できるような間口の広い授業の展開、指導の方法が必要となる。こうした発想は、初等、中等教育のレベルの単元として構想されてきているものの、特に学習者同士のやりとりに具体的に検討し指導方法へとつなげていくための研究は十分になされてきていない。このことから、単元としての学習指導過程を視野に入れつつ、特に学習者同士による話し合いの談話を分析することにより、問題解決を伴う自立した書くことへとつながる談話の展開を明らかにすることとした。

具体的には、主に次の3点を明らかにすることを目的として設定した。

- (1) 書くことの授業における教師と学習者の談話の特徴
- (2) 題材や書いた文章に基づく学習者同士の話し合いの談話の特徴
- (3) 自立した書く行為に連続するような問題解決、探求が生じる談話の展開の特徴

## 3. 研究の方法

(1) 小・中学校、高等学校において、ラジオニュースを課題文とした授業を行う。メモを取りながらラジオニュースを聞き、要約し、意見文を書く。続いて、グループで意見文を発表し、話し合いの後に再び意見文を書くという展開で授業を行った。ラジオニュースの題材は「野生鹿の食害」というものであり、各校種の学習者がそれぞれの知識や経験に基づいて議論し、自力で書いていくことにつながることを意図した。このような学習者同士の話し合い活動を取り入れた授業を行いビデオカメラとICレコーダーを用いて授業の記録をとる。記録をもとにトランスクリプトを作成する。また、学習者が書いた文章を文字データとして入力し、研究の基礎となる資料を作成する。

(2) 授業と学習者同士の話し合いの談話と文章のデータとの相関について分析を行う。

特に、情報のとらえ方に関わる指標に基づいて文章を分析し、学習者の表現の成り立ちについて考察をする。

(3) 主に学習者同士の話し合いの談話の展開について、Berry, M の談話構造の記述方法と Ventola, E の談話展開の「動的モデル」に基づいた分析を行う。この「動的モデル」は、発話者の談話への参加において選択される諸々の機能を記述することにより、発話者にとって構成されるコンテキストを具体的に明らかにするものである。このモデルを部分的に分析に応用することにより、授業場面における書き手の役割や題材に対する議論の参加の方法をとらえることにより、書くことに連続するような問題解決、探求を伴う談話の特徴を明らかにする。そして、談話の展開が各校種において導入可能なやりとりであるかどうかを小・中・高等学校の教員とともに検討し、実践に取り入れる方法について検討する。

#### 4. 研究成果

(1) 児童生徒の人間関係ならびに社会生活と学校生活における話題の共有の度合、そして単元における学習課題とそれに基づく児童生徒の学習への参加の様態等が書くことの学習指導に関わっており、同時にそれが校種によって違っていることが明らかになった。

(2) 書くことの学習指導においては、学習場面における参加者としての役割と題材を中心とした議論への参加者という役割の選択に関わっており、書くことの成り立ちに関わるような役割の変化にはマイクロな談話と参加構造が関わっていることが明らかになった。児童・生徒が小中高において一貫性を見いだせるような書くことの学習指導を構想する上で、題材と活動を中心とした学習の考え方の有効性が認められた。

(3) 授業の導入段階で題材についての情報を出し交換し合うこと、また学習者による作文の読み合い・話し合いにおいては、要点を口頭説明し、要点についての確認を問うこと、そして教材文になかった情報についての説明を求める等の質問の仕方をすることが、学習者にとっての文章を書くための知識を取り出し、構造化する上で有効であることが明らかとなった。また、また、「足場作りの相互作用のサイクル(scaffolding interaction cycle)」の談話展開のモデルを参考とした話し合いの方法が、書くことの学習の方略として活用可能であることを確認した。

(4) 書くことを通した学習においては、「発表(書き手)」－「発問」－「発表者(書き手)の応答」－「発問」という談話の展開を認めることができる。特に、「発表者(書き手)の応答」に続く「発問」がグループ内における題材の共有に関係していることが認めら

れた。「発表者(書き手)」がグループ学習の過程で自身の考えを維持しようとする場合、他のメンバーからの問いがなくなると発表者(書き手)の役割も完結し、自身の書くことについての変容は生じにくい。「発問」によって開始され、「発表者(書き手)の応答」－「発問」の展開において、話題への多様な観点をいかに導入するかが重要となる。課題の提示の方法と題材・話題についての情報が書かれた文章についての多様な観点を導入と論点の共有に必要となることが明らかになった。

(5) 書かれた文章の「論旨の理解」や「要約」を相互に交換し合うことを通して、参加者の「提案」によって談話が新たに展開されることにより、書くことに連続した問題解決を伴う話し合いがなされ新たなテキストが生成されていくことが分かった。特に、題材のとらえ方の前提となる文脈を伴った要求を話し合いの参加者がすることにより、書かれるテキストの成立に関わる題材の共有がなされ、書くことの再文脈化がなされることが明らかになった。指導においては、書き手に対して情報を簡潔に求める、要点を確認する、新たな提案を前提とした質問をする、といった話し合いの手続きを提示することが有効であると言える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計15件)

① 小林一貴、山本学、書くことの学習指導における話し合いの談話とジャンル選択、岐阜大学教育学部研究報告(教育実践研究)、査読無、第14巻2号、2012、pp.1-8

② 小林一貴、木村正幹、高等学校と大学における話し合い活動を通じた書くことの指導、岐阜大学教育学部研究報告(教育実践研究)、査読無、第14巻2号、2012、pp.9-18

③ 小林一貴、学習者の文章展開における評論文の表現の取り込み、グループ・ブリコラージュ紀要、査読無、第29号、2011.12、(左) pp.37-46

④ 小林一貴、書くことの学習過程における「相互依存性」の考察、岐阜大学国語国文学、査読無、第37号、2011.3、pp.(左)11-22

⑤ 小林一貴、グループ学習における「認定」の談話の諸相、岐阜大学教育学部研究報告(人文科学)、査読無、第59巻2号、2011.3、pp.27-34

<http://www.ed.gifu-u.ac.jp/~kyoiku/info/zinbun/pdf/590202.pdf>

⑥ 小林一貴、遠山健二、井深誠、松永健一郎、話し合い活動による書くことの「足場づくり」の指導、岐阜大学教育学部研究報告(教

育実践研究)、査読無、第 13 巻、2011. 3、pp. 1-8  
<http://www.ed.gifu-u.ac.jp/~koyoiku/info/jissen/pdf/1301.pdf>

⑦ 小林一貴、書くことの「足場づくり」の談話構造、月刊国語教育研究、査読有、No. 465、2011、pp. 50-57

⑧ 小林一貴、多和田仁、話し合い活動を通じた書き手の課題テキストへの関与、岐阜大学教育学部研究報告(教育実践研究)、査読無、第 12 巻、2010、pp. 13-20  
<http://www.ed.gifu-u.ac.jp/~koyoiku/info/jissen/pdf/1202.pdf>

⑨ 井深誠、松永健一郎、遠山健二、小林一貴、表現学習における書き手の視点の諸相— 学校行事を題材とした視点の授業を通して—、岐阜大学教育学部研究報告(教育実践研究)、査読無、第 12 巻、2010、pp. 21-28

⑩ 小林一貴、談話の相互交渉過程における学習者の書くこと、グループ・ブリコラージュ紀要、査読無、第 27 号、2010、pp. (左) 21-28

⑪ 小林一貴、表現学習における書くことの現場の具体性—ラジオニュースに基づく学習者の作文の分析を通して—、岐阜国語教育研究、査読無、第 8 号、2010、pp. 76-86

⑫ 小林一貴、作文の読み合いと書くことの文脈の変容、日本読書学会第 53 回発表要旨集、査読無、2009、pp. 15-24

⑬ 山本学・小林一貴、説明文指導における児童の課題提示表現の理解—「いろいろなくちばし」の指示語と写真に着目した授業を通して—、岐阜大学教育学部研究報告(教育実践研究)、査読無、第 11 巻、2009. 2、pp. 39-45

⑭ 小林一貴、言語活動と生活現実の問題化、岐阜国語教育研究、査読無、第 7 号、2009、pp. 37-41

⑮ 小林一貴、作文例における題材と書き手の当事者性、グループ・ブリコラージュ紀要、査読無、第 26 号、2008、pp. 27-34

[学会発表] (計 3 件)

① 小林一貴、書くことの学習における発話の再構成とジャンル生成、全国大学国語教育学会、2011 年 10 月 30 日、高知大学

② 小林一貴、書くことの「足場づくり」と談話コミュニティ、全国大学国語教育学会 2010 年 5 月 30 日、東京学芸大学

③ 小林一貴、作文の読み合いと書くことの文脈の変容、日本読書学会 2009 年 8 月 6 日、筑波大学附属学校教育局

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小林 一貴 (KOBAYASHI KAZUTAKA)

岐阜大学・教育学部・准教授

研究者番号：30345772

(2) 研究分担者 ( )

研究者番号：

(3) 連携研究者 ( )

研究者番号：